

令和4(2022)年度地質調査総合センター研究奨励賞決定！行谷佑一氏と宍倉正展氏による『紀伊半島南部の橋杭岩周辺で巨大津波の証拠を発見』が受賞

金子雅紀（地質調査総合センター研究企画室）

地質調査総合センター(GSJ)では、プレスリリース等を活用して、研究者が推進する先端的研究成果の社会発信を加速するため、令和2(2020)年度に地質調査総合センター研究奨励賞(GSJ研究奨励賞)を設置している。第3回の実施となる令和4年度は、2022年1月～12月にGSJの研究者が発表した合計25件の“プレスリリース”および“主な研究成果”を対象に、「社会課題の解決や当該学術分野に大きな影響を及ぼすことが期待される研究」を選考した。選考に当たっては、地質調査総合センター研究企画室と連携推進室の10名のメンバーから成る選考委員会を組織した。選考は、委員がそれぞれ奨励賞にふさわしいと考える3件の研究に対して理由を添えて投票した後、それらの結果を踏まえて総合センター長により決定された。

令和4年度のGSJ研究奨励賞は、活断層・火山研究部門の行谷佑一氏、連携推進室の宍倉正展氏による『紀伊半島南部の橋杭岩周辺で巨大津波の証拠を発見』が受賞した。受賞理由は「本研究は、和歌山県串本町にある名勝橋杭岩の周辺の巨礫の分布について、現地調査とシミュレーション

を組み合わせて、南海トラフ沿いで過去最大とも呼ばれる1707年宝永地震の津波よりも大きな津波がこの地域に襲ったことを解明したものである。本研究成果は国際誌Tectonophysics誌に掲載され、学術的にも高く評価されているとともに、防災対策や国土利用の戦略への活用が期待できるものである。またプレスリリース後から83件ものメディアで報じられており、社会からの反響も大きい。」であり、得票数は8票で選考委員会の満場一致の結果であった。

その他のプレスリリースや主な研究成果についても、学術的に重要な成果や、社会課題解決および地質情報DXに資する成果など極めて幅広い成果が多く見られ、GSJの研究者が生み出す研究成果の質の高さや、社会のニーズに沿った研究を進めていることを実感した。今後もプレスリリース等による研究成果の発信が促進されるとともに、GSJや産総研全体でのインターナルコミュニケーションの向上につながることを期待する。

なお、本賞の授賞式は令和5(2023)年4月12日に執



写真1 2023年4月12日に総合センター長室にて



り行われ、中尾総合センター長から賞状と盾が贈呈された
(写真 1)。その後、受賞者、地質調査総合センター幹部と

の談話では、本研究を着手するに至った経緯から今後の戦
略などについて語られた(写真 2)。



写真 2 授与式後の談話の様子